

フロイトの「本能論」

ーフロイトに於ける「心」と「本能」の探求ー

飯 岡 秀 夫

FREUD'S discussion on "instinct"
ーPursuit of "mind" and "instinct" in FREUDー

Hideo IIOKA

目次

- 序 「大いなるX」の探求ー「精神分析学的思考圏」ー
- 第1章 「本能」の形成とその性格
 - ー「無機物（物質世界）」→「有機体（生命世界）」→「本能」ー
 - 1 生命の誕生から本能の誕生へー「生の本能（エロス）」と「死の本能（サナトス）」ー
 - 2 「本能の保守的性格」ー「涅槃原則」と「快感原則」ー
 - 3 「外的強制」による「生命体」の進化・発展ー発展段階に応じた「本能」の形成ー
 - 4 それぞれの流儀による「生→死」の経路
- 第2章 「心」と「本能」
 - 1 「心」とは何か
 - 2 「心」と「本能」との関係1ー「境界概念」ー
 - 3 「心」と「本能」との関係2ー「本能の行方と運命」ー
 - 4 「自由に動き得る可動エネルギー」の「拘束されたエネルギー」への転化
- 第3章 「本能」概念の解釈がえ
 - 1 「性本能」と「自我本能」との区別・対立
 - 2 「対象リビドー」と「ナルシズム的リビドー」
 - 3 「生の本能」と「死の本能」との区別・対立
- 第4章 「生の本能（リビドー）」と「死の本能（モルティド）」との混合と解離
 - ー「置換エネルギー」ー
- 結び 「本能論」から「人間論」へ

序 「大いなるX」の探求―「精神分析学的思考圏」―

本稿がめざす北極星はフロイトの「文明論」である。フロイトの「文明論」はその「人間論」に支えられており、その「人間論」は、さらに、「心」の問題となかはずく「心」的作用の奥底の源泉である「本能」の議論に支えられている。それ故、フロイトの「文明論」を十全に理解するためにはフロイトの「本能論」（「フロイトに於る『心』と『本能』の議論」）から始めなければならない、ということになる。

フロイトの「本能論」（「フロイトに於る『心』と『本能』の議論」）をさらにさぐっていくと、その議論の奥に存在しその議論を支えているフロイトの「生命（生物）」観→「天地宇宙」観に到達する。つまりフロイトの「文明論」は「天地宇宙」観→「生命（生物）」観→「本能論」（「『本能』→『心』の議論」→「人間論」に支えられて展開されているのである。

本稿はフロイト「文明論」の基礎理論としてのフロイトの「天地宇宙」観→「生命（生物）」観→「本能論」（「『本能』→『心』の議論」）までを論ずること―「天地宇宙」観→「生命（生物）」観の上にたってフロイトは「心」とその作用の源泉たる「本能」をいかに探究し、いかに把握しているかをさぐることをテーマとしている。しかし、そのテーマとの関連で、ここであらかじめ注意しておかなければならないことがある。

それは、いまかりにフロイトの「天地宇宙」観から始まって「生命（生物）」観→「『本能』→『心』の議論」→「人間論」→「文明論」に至る体系をフロイトの「文明論」の体系と名づけるとするならば、フロイトの「文明論」の体系はすべて「精神分析学的思考圏」（参考文献〔VI〕，〔6〕，P.304）の内部にとどまっている―そこから一步でも外に出るものではない―ということだ。

フロイトはその「科学的世界観」⁽¹⁾ から「天地宇宙」や「生命（生物）」的諸現象はいうまでもなく人間の「心理作用」→人間的営為→文明的諸現象に至るすべての現象は原理的に不可思議なもの―「大いなるX」（参考文献Ⅲ，〔6〕，P.168）を保持しつつけるもの―ととらえ、「精神分析学的思考」をもって、しかも「精神分析学的思考」の範囲内で、「大いなるX」の探求にのり出し、それへの接近を試みている。ちなみに、ここで「精神分析学的思考」というのは、第1に治療のための患者の心の、次いで教育のための健常人の心の、そしてなかはずく自己認識→人間理解のための自分自身の心の、観察と分析（推論）である。それに加うるに人間の物理的・肉体的・精神的的作用を奥底から支える物理・化学的、生物・生理学的、医学的、文化人類学的等の「科学的発見」とそれにもどづく「思弁（Spekulation）」である。

フロイトの学問（思想）的営為は「精神分析学的思考」をもって、しかもその範囲内で、さまざまな「仮説」を仮設し、さらにまたその「仮説」を修正して仮設し直し、そのくり返しのなかで、一步一步「大いなるX」に接近していく努力の積み重ねであり、フロイトの「心理学」とそれをベースとする「文明論」の体系はその過程で造り出された「仮説」的仮設の体系なのである。⁽²⁾ それ

故、フロイトの「心理学」と「文明論」の体系は—あるいはまた、本稿で論ぜられる「本能」→「心」の「議論」は—「科学的世界観」をもつものにとつてはいうまでもないことであるが、「大いなるX」への接近をめざすかぎり、いかようにも変更可能なもの、つまり「仮説」的仮設として存在しているのである。

そのことを確認した上で以下、フロイトがいかなる「仮説」を仮設して、「本能」→「心」という「実在そのもの」に接近していったかをみていくことにしよう。

第1章 「本能」の形成とその性格

—「無機物（物質世界）」→「有機体（生命世界）」→「本能（Trieb）⁽³⁾」—

フロイトはレーニンのボリシェビキ革命には批判的、少なくとも、冷淡であったが、精神（心の作用）については、以下に論ずるように、マルクスにまけないくらい唯物論的な見方をしている。『「有機体の中には普遍的な物理的・化学的力」しか働いていない』という師ブリュッケらの主張（参考文献〔IX〕, P.40）をそのまま継承し、自分の精神分析学を「唯物論」の上にうちたてようとしている（参考文献〔IX〕, P.515）かの観を呈しているのだ。

「生命世界（生物）」に先行して「物質世界（無生物）」が存在していたとしかいえない。⁽⁴⁾ この認識がフロイトの「心理学」→「文明論」の出発点である。「物質世界」に充満する物理・化学的力（エネルギー）が生命エネルギーを生み、さらにそれらから心的エネルギーが現象する。フロイトが精神作用の根底を物理的・肉体的現象の「随伴現象」ととらえる⁽⁵⁾ のはそのような根本的認識によるものと考えられる。

生命以前の世界、つまり「物質世界（無生物界）」を支配しているのは「引力」と「反撥力」の対立である（参考文献〔VIII〕, [9], P.160）。この「物質世界」を支配する「引力」と「反撥力」というアンビヴァレントな力（エネルギー）が「生命世界」に於る、本稿で詳論するがごとき、二つの基本本能の「共同」と「相反」作用に呼応し、「物質世界」と「生命世界」を貫徹するこのようなアンビヴァレントな力（エネルギー）が人間の心的世界を含む天地宇宙、森羅万象をかけめぐっている。フロイトの「心理学」と「文明論」の体系はこのような極めて「唯物論」的な「天地宇宙観」・「生命観」の上にうちたてられているのである。

以下そのことを4つの節からさらに詳しく論ずることにしよう。

1 生命の誕生—「生の本能（エロス）」と「死の本能（サナトス）」—

殆どが「大いなるX」のなかにある「生命（『生きながらえる物質』）の誕生」について、フロイトには次のように「仮説」している。

「過去のいつの時代かに、今日まだ想像することもできぬ力作用によって、生命のない物質の中

に生物の特性がよびさまされた。」(参考文献〔Ⅲ〕, 〔6〕, P.174)。

「生命の誕生」と共に「生命体(有機体・生命ある物質)」のなかに二つの本能が生まれる。ひとつは「生命の誕生」と共に発生した「生命体」内部の緊張(生命的エネルギーの充満)からのがれて、平衡を取りもどそうとする—生命的エネルギーを零の状態にもどろうとする—、つまり、「無生物に還ろうとする本能」である。フロイトはそれに「死の本能(サナトス)」の名を与えた。もうひとつは「生命体」をたゆみない発展にみちびく外的強制—「太陽の作用・地球的環境」—に駆りたてられて、「生命体」の発展を押し進めていく—外界と内界のカオスをコスモス化していく—「本能」である。フロイトはその「より多く生きようとする実体を集めてより大きい単位にまとめあげて行こうとする」(参考文献〔Ⅶ〕, 〔1〕, P.473)「本能」に「生の本能(エロス)」の名を与えている。フロイトは「精神(心の作用)」の根底に、「生命体」の生命活動→「精神生活」を支配する、アンビヴァレントな、この二つの「本能」の存在・作用があることを仮説したのである。

2 「本能の保守的性格」—「涅槃原則」と「快感原則」—

外傷神経症の兵士、道徳的マゾヒズム患者等が示す「反復強迫」は本能の特性たるその「保守的性格」によるが、それは「生命体」→「心」に充満するエネルギーのホメオスタシスな「定常状態」—その究極は「無機的世界の静止状態」たる、生命エネルギー零の「死の状態」—をめざす「死の本能」に起因する。フロイトは「死の状態」を究極とするホメオスタシスな「定常状態」に向かおうとする「死の本能」のこの「保守的」な傾向に「涅槃原則(恒常原則)」の名を与えた。⁽⁶⁾

しかし、フロイトにあって、「涅槃原則」に沿って保守的性格を堅持する「死の本能」は一直接に「死の状態」に驀進するととらえられているわけではない。それぞれの「生命体」の進化・発展の段階に応じて、それぞれの「生命体」の生命エネルギーのホメオスタシスな「定常状態」はそれぞれ異なっているが故に、それぞれの「生命体」はそれぞれに固有の「本能の保守的性格」を有することになるからである。つまり、「本能の保守的性格」とは一直線に「死の状態」に向う傾向なのではなく、「生命体」がその進化・発展の段階で獲得した、その「生命体」独自のホメオスタシスな「定常状態」の回復をめざす傾向なのである。このことについては3と4の節で、さらに詳しく論ずることにしよう。

さて究極的には「死」—「化学的緊張の均等化」—にむかう「涅槃原則」に対して「生の衛兵(番人)」たる「快感原則」はいかなる関係を有しているのだろうか。フロイトは「快感原則」の機能について次のようにいっている。

「快感原則は一つの傾向であって、ある機能に役立つことになる。その機能とは、心的装置に興奮が起こらぬようにするか、あるいはその興奮の量を一定に、またはできるだけ低めに保つことである。」(参考文献〔Ⅲ〕, 〔6〕, P.193)。

「不快」つまり「神経系」→「心的装置」に於る興奮量（エネルギー量）の増大・緊張をさけ「快」つまりその減少→弛緩を求める心の傾向たる「快感原則」は、その機能面では、引用文から明白のように、ホメオスタシスな「定常状態」をめざす「涅槃原則」と完全に対応している。フロイトは「快感原則」の機能を「無機的世界の静止状態にもどるといふ、全生物のもっとも普遍的な努力の一翼を担っている」（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.193）ものと考えていたのである。⁽⁷⁾

3 「外的強制」による「生命体」の進化・発展 ―発展段階に応じた「本能」の形成―

「生命体」は「単細胞（アメーバ）」として誕生し、さまざまな進化・発展の迂路を経てその最高段階―「人間」―にまで到達している。「生命体」を進化・発展に駆りたてたものは何か。

フロイトは「生命体」の内部には「生命体」をして進化・発展に駆りたてた内発的な契機はない、「生命体」は、本来、保守的な本能に従って生きており、従って、たえず同一の生活経路しか反復しないとみている。それでは「生命体」を進化・発展に駆りたてたものは何か。フロイトはいう。「生命体」をたゆみない発展に駆りたてたものは「外的強制」であると。

「究極のところ、有機体の発展に刻印をきざみつけたものは、われわれの地球と、その太陽にたいする関係の発展史にはかなるまい。」（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.173）。

フロイトに従えば、「生命体」を進化・発展に駆りたて、その発展段階に応じた「本能」を形成せしめるものは「太陽」エネルギーと「地球」環境という「外的な強制」なのだ。「生命体」は「外的な強制」によって押しつけられた生活経路の変化を、保守的な本能のなかにことごとく受け入れ、それを反復のために保存している。フロイトは、このように、「生命体」の「保守的な本能」を「外的強制」によって押しつけられて形成されたもの、それぞれの進化・発展の段階にあるそれぞれの「生命体」がその「生命体」の発展の迂路→生活経路の変化に応じて歴史的に獲得したものととらえているのである。⁽⁸⁾

そして、フロイトは外部からの刺激作用によって歴史的に獲得された「本能」が、今度は逆に内側からの刺激として「生命体」の「神経系」に働きかける場面を想定して、次のように仮説する。「本能こそ、無限の能力をそなえた神経系を今日の発展段階まで高めた進歩の根本的要因である」（参考文献〔Ⅱ〕，〔6〕，P.62）と。

4 それぞれの流儀による「生→死」の経路

「生命体」をつき動かす「死の本能」は「生命体」をして直線的に「死」にむかわしめるものではない。何故なら、決定力をもつ外部の影響が変化して「生命体」を原始的な生活経路から次第に大きく偏向させ、死という目標に到達するまでに、ますます複雑な迂路をたどるように強いた（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.174）からだ。そしてその結果、そのような流儀で生きることを強迫する、つ

まり、生の複雑な迂路・経路をたどって死にむかって生きることを強迫する「保守的な本能」がその「生命体」の内部で形成されてしまっているからだ。

生命史は「死への経路」の複雑化の過程であり、「死への経路」を複雑化する力が「生の本能」である。そして「生命体」の生命現象は「保守的な本能」につき動かされた、死に至るまでの生の迂路・経路の墨守なのである。あらゆる「生命体」はそれぞれの流儀－生の迂路・経路の墨守－に従って死ぬことを望んでいる。あらゆる「生命体」はそれぞれの進化・発展の段階に応じて獲得された「保守的な本能」－それは「生命体」の遺伝因子（DNA）を連想させる－につき動かされて、それぞれの流儀で死にむかって生きるという「性向」を与えられているのだ。

フロイトは「生の本能」とそれに根拠を置く「快感原則」を「生命を守る番兵」にたとえ、「生命を守る番兵」もそれぞれの流儀で－それぞれの生の迂路・経路を経て－の「死」に仕える衛兵であったのだ、と次のようにいっている。

「有機体は、それぞれの流儀にしたがって死ぬことを望み、これら生命を守る番兵も、もとをたせば死に仕える衛兵であったのだ。」（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.174）。

「生命体」が「死の本能」によってつき動かされているのにもかかわらず「危険」に対して激しく抵抗するというパラドックスも自分の流儀で死にむかおうとする、「保守的な本能」がなせる業なのである。⁽⁹⁾

以上、それぞれの「生命体」はその「生命体」の進化・発展段階に応じて獲得された「保守的な本能」に忠実に従って、それぞれの生の複雑な迂路・経路をたどって、それぞれの流儀に従って死に向うことを望み、それを墨守していることをみた。このような「生命体」の生命現象は、実は、「生の本能（エロス）」のエネルギーである「リビドー」と「死の本能（サナトス）」のエネルギーである「モルティド」⁽¹⁰⁾との混合、結合、合金化とその解離の問題と深くかかわっているのであるが、その問題の詳細は第4章にゆずることにしよう。

第2章 「心」と「本能」

ここではフロイトが「心」とその構造および機能をどのようにとらえ、それを「本能」とどのように関連づけているかを、4つの節にわけて論ずることをテーマとする。

1 「心 Psyche」⁽¹¹⁾（あるいは「心の作用・心的生活Seelenleben」⁽¹²⁾）とは何か

フロイトは「心（の作用）」と呼ばれるものには二種類の系列があるとみ、それに二種類の系列からアプローチしている。

「第一のものは、身体器官とその舞台である脳（神経系統）」の系列である（参考文献〔Ⅷ〕，〔9〕，

P.156～7)。

自然科学的(物理・化学的、生理学的、解剖学的)な「ニューロン」研究—それを「感覚ニューロン」と「運動ニューロン」に分ち、エネルギーがニューロン興奮→ニューロン運動となっていかに「意識」活動として伝わっていくかの研究—は「心(の作用)」へのアプローチの、第1の系列に属する。⁽¹³⁾

第二のものは「意識活動」—知覚、感情、思考過程、意志行動—である。「この意識活動は、直接に与えられるものであって、どんな記述方法でも、それ以上は理解不可能な究極的なものである」(参考文献〔Ⅷ〕, [9], P.157)。

この二つの系列の間には「大いなるX」が介在し、二系列の終端同士の間直接的な関係は不明のままである。それ故、「心(の作用)」と呼ぶものをより正しく解明し、それにより近く接近するためには「精神分析学的思考」にもとづいて、「仮説」を仮設していくより他に方法がない。

フロイトは「心(の作用)」と呼ぶものに接近すべく、まず、二つの基本的「仮説」—二つの系列の終端あるいは起始点から出発する「仮説」—を仮設する。

第1のものは「心(の作用)」と呼ぶものの「局在性」に関する仮説—「心(の作用)」には空間的な拡がりがあり、総合性を持つ多数の部分からなり、「心」とはそのような特徴をそなえた一種の装置であり、「心の作用」とはそのような心的装置の機能の現われであるという仮説—である。⁽¹⁴⁾

この基本的仮説から、次いで、「エス」、「自我」、「超自我」からなる「心的装置」の構造が仮説される。⁽¹⁵⁾

基本的仮説の第2のものは「心的現象」—「心の作用」—は「物理的・身体的現象」の随伴現象であり、「身体的随伴現象」といわれているものが本質的に「心的なもの」であるという仮説である。⁽¹⁶⁾

この基本仮説の故に、つまり、フロイトが「心」とその作用の力点を身体的過程に置きその中に真に「心的なもの」を認識しようとしたが故に、フロイトの心理学の土台に「本能」がすえられることになり、「心(の作用)」と「本能」との関係が鋭く問われねばならなくなるのである。

2 「心(の作用)」と「本能」との関係1 —「境界概念」—

フロイトは「本能」を「生命体」をして一定方向に駆りたてる「ある種のエネルギー」あるいはその「量」として仮説している。諸生命体はその身体(諸器官さらに細胞)内に、それぞれの生命史に於る発展段階に応じた、一定量の(ホメオスタシスな)エネルギーを保育しているが、その生命体の器官ないしは身体部分に刺激が加わると身体内に存在する(生命)エネルギーが増大して興奮となって動き出し—この身体刺激に発する興奮(エネルギー量の増大→移行)が「本能の源泉」である—、その身体刺激に発する「(生命)エネルギー」は「心的装置」にむかって殺到しそのなかに入りこみ、それが「(心的)エネルギー」となってあらわれるのである。

フロイトは「(生命) エネルギー」→「心的装置」への侵入→「(心的) エネルギー」としての出現の過程は「大いなるX」につつまれていると述べているが、わずかに次のごとき仮説をたててその過程を説明している。「身体的なもの」と直結している「心的なもの」は「心的装置」の基体をなす「エス」であるが、「エス」の身体的なものへ向っている末端は開いていて、そこから本能的欲求(生命エネルギー)を自分のなかに取りこみ、取りこまれた本能的欲求(生命エネルギー)は「エス」のなかで心理的表現を見い出ると。かくして「エス」は「(心理的) エネルギー」で「沸き立つ興奮に充ちた釜」として存在することになるのである。⁽¹⁷⁾

かくしてフロイトにあって「本能」とは「身体的なもの(生命エネルギー)」と「心的なもの(心的エネルギー)」にまたがる「境界概念」であり、それは肉体の内部に発して「心的装置」に到達する心的代表(者)なのである。フロイトはこのことを次のように表現した。

「次に生物学的側面から精神生活を考察してみると、『本能』は精神的なものと身体的なものとのあいだの境界概念 Grenzbegrif であるように思われる。すなわち本能は肉体内部に由来して、精神の中に到達する刺激の心的代表者 psychische Repräsentant であり、肉体的なものとの関係の中で、精神的なものに課せられる活動要求を測る一つの尺度である。」(参考文献〔Ⅱ〕, [6], P.63)。

さて、エネルギーの一定量を生命的にあるいは心的に保有する「生命体」はその「定常状態」を超えるエネルギー(力)の侵入に対しては肉体的にあるいは心的に自己防衛をしなければならない。外側から来るエネルギー(力)→刺激に対しては、感覚器官が感受する「危険信号」を知覚して、逃走すればことたりる。しかし「本能」に発する内側からのエネルギー(力)→刺激については、知覚すれども逃走することはできない。「本能」はこのように恒常的力のように作用する。

以上みてきたように、本能の主要な性格は、第1にその源泉が生命体の内部にあることであり、第2にそれが恒常的力としては出現することにある。

3 「心(の作用)」と「本能」との関係2 —「本能の行方と運命」—

「本能」の源泉というのはある器官ないしは身体部分の刺激→「生命体」内部の興奮(エネルギーの増大→移動)であることはすでにみた。「本能」の目標というのはこの興奮(エネルギー)の解消である。この源泉から目標への途上で「本能(生命的・心理的エネルギー)」は心理的に作動する。つまりフロイトは「心的過程」—それは「無意識的」、「前意識的」、「意識的」過程の三層からなる—を本能の源泉から目標に至までの作用の過程としてとらえたのである。

この「心的過程」にあって、「心(的措置)」が果す機能の第1の基本的なものは、「涅槃原則」・「快感原則」に従って、「生命体」あるいは「心的装置」内部のエネルギーの「定常状態」を保つべく、それを脅かす危険のある、外界からの「外的刺激」と内部(本能)からの「内的刺激」とを「知覚」することである。

この機能を果すのが「心的構造」の最上部を構成する知覚－意識体系である。その知覚－意識体系の上にあくまで外部から受けとる知覚(感覚知覚)と内部から受けとる知覚(感覚・感情)とを土台にして、エスの変形・分離としての「自我」が形成されていく。⁽¹⁸⁾ こうして形成された「自我」は「エス」に充満している(心的)エネルギー(対象リビドー)を吸いあげ、自ら「エス」に並ぶ「エネルギーの貯蔵所」になり、⁽¹⁹⁾ エネルギー備給の機能を果すようになる。

「エス」が基体をなす「心的装置」の内部に「エス」の変形・分離としての「自我」が、さらにその内部に「超自我」が形成されていくに従い、「心的装置」の果す機能の、第2の、最も重要なものが出現する。「本能の支配」－「自我によるエスの支配」－という機能がそれである。それと共に「心的過程」は主として「快感原則」に従う「一次過程」から主として「現実原則」に従う「二次過程」へ移行する。

ここまで論じてはじめて本能の「行方」－「心的装置(エス)」にはいりこんだエネルギーの行方－とその「運命」－本能にたいする防衛のあり方(逆転、向け換え、抑圧、昇華)－を論ずる時をむかえられる。何故ならフロイトにあって「本能の行方と運命」の焦点は「心的過程」の「一次過程」から「二次過程」の問題－「自我によるエス支配」の問題－におかれているからである。

さて、最初「心的装置(エス)」に入りこみそこに充満しているエネルギーについてみると、そこで表面だって沸きたっているのは生の本能「エロス」のエネルギーたるリビドーだけである。《死の本能(サナトス)のエネルギーたるモルティドは本来的に唾なので沈黙して表にあらわれて来ない。》この「生の本能」のエネルギーであるリビドーがその「心的過程」のなかでいかなる「行方」と「運命」をたどるかについてみると、それは大きく三つの行方・運命に類別できる。

第1は無事目標が達成されて、「リビドー」が解消されるという行方である。

第2はなんらかの理由－たとえば危険の察知→「断念・抑圧」－で目標達成が不可能になるか延期されて、「心的装置」の内部にリビドーが存続しつづけるという行方・運命である。それが昂ざると「不安」や「神経症」をひきおこす。

第3は「エス」に存在するリビドーが「破壊」され－その典型はエディプス・コンプレクスが正常に解決した場合にみられる－、「脱性化」したエネルギーとなって「自我(や超自我)」に取りこまれ、「自我(や超自我)」の力(エネルギー)となって作用するという「運命」である。この本能の第3の行方・運命と共に、「一次過程」が「二次過程」に置き換えられる。「自我のエス支配」が本格的に始まるのである。

この本能の第3の行方・運命についてはそれが「心的装置」の最も重要な機能にかかわるので節を変えて、さらに詳しく論ずることにしよう。

4 「自由に動き得る可動エネルギー frei bewegliche Energie」の「拘束されたエネルギー gebundene Energie」への転化

「心的装置」の第2の、最も重要な機能は「心的装置(エス)」で沸きたっているリビドーを

「拘束」して、その自由に流動するエネルギーを静的な中性エネルギーに変化させること、つまり、「一次過程」を「二次過程」に置き換えることである。

この「自由に動き得る可動エネルギー」の「拘束されたエネルギー」への転化ーリビドーの脱性化 Desexualisierungーと、その結果出現する「超自我」の形成⇒「自我のエス（本能）支配」はいかにして可能なのであろうか。

それは、簡潔に言えば、対象愛的リビドーの自己愛的リビドーへの転換、さらに言えば、「自我」の「対象リビドー」の占有によって可能になる。⁽²⁰⁾

このことをもう少し詳しく説明しよう。

「エス」のなかで沸騰している心的エネルギーは「対象リビドー」として存在している。つまり「エス」の愛は対象に向けて備給されている。しかしなんらかの理由で「対象愛」を「断念」せざるをえなくなると、「自我」は「エス」の愛の対象をその対象との「同一視」によって自己の中にとりこみ、対象の性状を身につけることによって、自己をエスの愛の対象にする。「自我」はこのようにして「エス」のリビドーの対象への備給を棄てさせ、自らが唯一の「エス」の愛の対象となって立ちあらわれる。⁽²¹⁾ この対象リビドーが自己愛的リビドーに転化する過程で「エス」で沸きたつ「対象リビドー」（自由に動き得る可動エネルギー）は脱性化されるか昇華され、⁽²²⁾ 「拘束されたエネルギー」に転化するのである。

こうして「断念」と「同一視」によって棄てられたリビドーの対象備給の沈殿が「超自我」をあるいはまた「自我の性格」を形成することになる。そしてそこに入りこんだ「脱性化され、拘束されたエネルギー」が「エス（本能）」を支配する「抑制力（エネルギー）」として作用するのである。それが「一次過程」を「二次過程」に転化させ、また、「集団」の内部では、「拘束されない本能」にもとづく「性愛的な sinnlich」傾向を「目標を禁止された本能」でむすばれた「友愛的な zärtlich」傾向に転化させているのである。⁽²³⁾

ブロイアーの「二種のエネルギー備給」理論を援用しての、フロイトの仮説は次のように要約することができるであろう。

「高度のエネルギー備給をもった体系は、あらたに流入するエネルギーを受け入れ、……それを心理的に『拘束する』ことができる」（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.167）、つまり、自我が強化されるとその「心的装置」はそこに流入した自由に流動するエネルギーを「拘束」して脱性化し、「静止した備給状態」に変化させ、それを「静止せる備給エネルギー」として「自我の性格」やその根幹をなす「超自我」のなかに「貯蔵」することができる、そして、この「自我の性格」や「超自我」のなかに「貯蔵」された「静止せる備給エネルギー」が「抑制力・拘束力」として「エス（本能）」の支配にのり出すのであると。

その仮説の上に立ってフロイトは次のように結論（推測）する。

「固有の静止せる備給エネルギーが高度であればあるほど、その拘束力も大きくなるであろう」（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.167～8）と。

第3章 「本能」概念の解釈がえ

「生命体」をつき動かす「本能」は内部興奮の最大の源泉であり、「心的装置」に伝達されるあらゆる力・作用の代表である。それ故それは心理学研究のもっとも重要なテーマであるが、「もっとも暗黒な要素」(「大いなるX」)でもある。⁽²⁴⁾「もっとも暗黒な要素」であるが故に、それへの接近を試みるフロイトの「仮説」はさまざまに仮設しなおされている。以下、フロイトによる「本能」概念の解釈がえー「仮説」の仮設がえーを三つの節に分けて論ずることにしよう。⁽²⁵⁾

1 「性本能」と「自我本能」との区別・対立

フロイトは前期の段階で⁽²⁶⁾はさまざまな「本能」を「性本能」と「自我本能」という二つの基本「本能」に還元して区別し、その二大本能の対立・葛藤という観点から彼の心理学を展開している。

この段階でのフロイトの学説、なかんずく「初期学説」⁽²⁷⁾はあくまで徹底した「経験の解釈」ー「症状」という現象の観察とその原因をさぐる分析ーの上に築かれた学問体系である。学説の基礎をなすのは主として「観察」である。この「観察」を基礎とする「経験の解釈」から、フロイトは「快楽原則」に従ってリビドーの充足を求める「性本能」と、「現実原則」に従って自己保存をはかり、抑圧、検閲、防衛構成や反動形成の機能を果す「自我本能」との、根源的区別と両者の対立・葛藤という仮説を仮設したのである。そしてその「仮説」を利用して「神経症」の分析・治療に役だてたのである。

以上のごときフロイト心理学の「観察」→「経験の解釈」→仮説の仮設→その利用による分析と治療への役立てという構図はフロイト心理学の原点にあるものとして正しくおさえておかねばならないものである。しかし、それにもかかわらず、フロイト自身が自ら、「性本能」と「自我本能」との区別あるいは対立という仮説は、根本的には、「生物学」に根拠づけられていると告白しているのである。

「このさいはっきりと告白しておきたいと思うのだが、それは自我欲動と性の欲動とを区別しようとするこの仮説、すなわちリビドー理論は、すくなくとも心理学的な基礎のうえに立ってはいいるが、根本的には生物学によって支えられている、ということである。」(参考文献〔Ⅲ〕, 〔6〕, P.114)

1920年の「快感原則の彼岸」で劇的になされる「本能」概念の解釈がえも、実は、同じ「生物学」を根拠としてなされているのである。以下、フロイトにあってその学説の「性本能」と「自我本能」との区別・対立という仮説が「生物学」的にいかに支えられているかをみておくことにしよう。

「生物学的考察」に従えば、個人とは「不滅の実体を担っている死すべき者」—個的生命の自己保存→死にむかって自己目的的に生きていると同時に生命の系統的進化という鎖の一環としてそれに奉仕して生きる者、見方を変えれば「不死の生命」という自己の遺伝形質を担ってその付属者となって生きる者—であって、⁽²⁸⁾「性本能」と「自我本能」との区別・対立はそのような二重生活—個の生存と類の系統的進化の環—を営んでいる個人の二重機能の反映である。

フロイトは、以上のように、「性本能」と「自我本能」との区別・対立を生物学的に基礎づけたのであるが、二重生活を営んでいる「不滅の自体を担っている死すべき者」の内実を、さらに生物学的にほり下げている。

「生命ある物質」は「死ぬ部分（ゾーマ・肉体）」と「不死の部分（胚細胞）」とに分けられる。「ゾーマ」は自然死にゆだねられているが、「胚細胞」は生殖→種の保存に奉仕し、「新しいゾーマで自己を包むことのできるかぎり」は、潜勢的にpotentia不死である」（参考文献〔Ⅲ〕、〔Ⅵ〕、P.179）と。⁽²⁹⁾

以上のようにフロイトの「性本能」と「自我本能」との区別・対立というフロイト心理学の基礎をなす仮説は、まずは「観察」→「経験の解釈」という心理学的アプローチから仮説され、次いで、「ゾーマ」と「胚細胞（胚原形質）」の区別・対立→「不滅の自体を担っている死すべき者」の二重機能という「生物学的考察」によって裏うちされているのである。

2 「対象リビドー」と「ナルシズム的リビドー」

「ヒステリー」や「強迫神経症」といった「感情転位型神経症」の分析と治療に関するかぎり、「性本能」と「自我本能」との対立・葛藤—「自我」による「リビドー」の抑圧—という仮説で十分「心理学」的課題にこたえることができた。しかし、「メランコリー（うつ病）」、「早発性痴呆症（統合失調症）」、「パラノイア」といった「精神病」の分析と治療についてはそれだけの理論装置（仮説）では不十分であった。そのためには「心理学的自我」へのさらなる接近を可能にする理論装置（仮説）が要請され、そのために、「本能」概念の解釈がえ—「本能」についての新しい仮説の仮設—が迫られたのである。

1914年の「ナルシズム入門」では「本能」概念の最初の解釈がえがなされている。「対象リビドー」と「ナルシズム的リビドー」という新概念の登場がそれである。それは「生物学」的論拠に支えられた仮説—「性本能」と「自我本能」の仮説—を、さらに、精神分析的研究自体から得られた仮説で補強するものであった。⁽³⁰⁾

精神分析的観察はリビドーが規則的に対象からひきはなされて自我に向けられていることに注目していた。そして最初期の小児のリビドー研究のなかで、自我こそリビドーの本来の根源的貯蔵庫であり、リビドーはまずそこから発して対象に達するものであるとの推測がなされた。ここに「自我にふりあてられた根源的リビドーの備給」（ナルシズム）という仮説が登場したのである。

この原初の自我（＝エス）に貯蔵されている根源的リビドーから発し、「対象」にむかって備給

されるリビドーが「対象リビドー」である。この根源のリビドー（「ナルシシズムのリビドー」）とそこから送り出される「対象リビドー」との間には一つの対立があり、一方が余計に使われればそれだけ他方が減っていく、つまり、両者は「対象への割当に対して、あたかも原生動物とそれが送り出す偽足とのあいだのそれに似た関係に立つ」（参考文献〔Ⅰ〕，〔Ⅴ〕，P.111）のである。そしてフロイトは原初の自我（＝エス）に内在する根源のリビドーが自他の区別なく即自的に自己にむけられている愛を「一次的にナルシシズム」と呼び、それに対して、リビドーの対象への備給を内にとりこむことによって生ずる自己への愛を「二次的ナルシシズム」と呼んで、両者を区別したのである。

さてそれでは、自我というリビドーの根源的貯蔵庫に内在している「ナルシシズムのリビドー」の正体とはいったい何なのであろうか。

そのことについてフロイトは次のように仮説する。「ナルシシズムのリビドー」というのは性的本能の力（エネルギー）が外化されたものであって、それ故、「自己保存本能」と同一視せざるをえないものである（参考文献〔Ⅲ〕，〔Ⅵ〕，P.184）と。

この仮説に従えば、今までの大前提であった「性本能」と「自我本能」との区別・対立という仮説は修正されざるをえない。何故なら「自我本能」の主要構成要素である「自己保存本能」は「ナルシシズム的」なものではあるが「リビドー」に他ならず、従ってそれは「性本能」の代表に他ならないからである。

「このようにして、自我本能と性的本能との根源的な対立は不充分なものになった。自我本能の一部はリビドー的であるとみなされた。」（参考文献〔Ⅲ〕，〔Ⅵ〕，P.184）。

こうして「自己保存本能」は「性本能」と並んで「生の本能（エロス）」のなかに組みこまれていくことになるのである。

3 「生の本能 *Lebenstrieb*」と「死の本能 *Todestrieb*」との区別・対立

フロイトの「本能」概念の根底からの解釈がえは1920年の「快感原則の彼岸」でなされている。

フロイトは「自我本能」のうちの自己保存に役立つ本能はリビドー的なものであると仮説し、さらに、「自我」のなかには「自己保存本能」以外にも、まだ、他の本能在活動しているにちがいないと推測した。この推測の果に登場するのが「死の本能」という概念である。

フロイトの「生の本能」と「死の本能」との区別・対立の仮説も「生物学的考察」の成果の上に仮説されている。

フロイトがA・ヴァイスマンに従って「生命ある物質（有機体）」を「死ぬ部分（ゾーマ）」と「不死の部分（胚細胞）」の区分からとらえていることはすでに1の個所で論じておいた。フロイトはこの「生命ある物質」を構成する「死ぬ部分（ゾーマ）」と「不死の部分（胚細胞）」のそれぞれ

の質料にではなくその中で活動する力（エネルギー）に注目して、「生の本能」－生命の更新を求め、実現するもの－と「死の本能」－生命を死にみちびこうとするもの－との区別・対立の仮説を仮設したのである。⁽³¹⁾

「命ある物質を形態学的に観察しているヴァイスマンは、その中に死の手中に帰する成分、つまりゾーマ、あるいは性的＝遺伝的要素をのぞいた身体と不死の成分、つまり種の保存、あるいは生殖に奉仕する胚原形質とをみとめている。われわれは生命ある質料ではなく、その中に活動する力を問題として、二種類の衝動を区別することになった。その一つは生命を死にみちびこうとするものであり、もう一つは性的衝動であって、繰り返えし生命の更新を求め、かつそれを実現するものである。」（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.179）。

さらにフロイトはE・ヘリングの生命物質における過程についての理論－生物中にはたえず二種類の過程が相反した方向で行なわれている。一つは建設的（同化）の方向であり、もうひとつは解体（異化）の方向であるという理論－にも注目している。そしてその理論に対応させるかのように、「本能群」を次の二つに区別し対立させている。「一方の本能群」（「死の本能」）は生の究極目標（死）にできるだけ早く到達するために前方へ突き進み、「他の本能群」（「生の本能」）はこの経路のある地点で跳ね返って、この道程を一定地点からもう一度繰り返えし、この経路の持続を延長しようとしている（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.176）と。

以上のようにフロイトは「生物学的考察」に依拠しながら、「生の本能」と「死の本能」との区分・対立を仮設したのであるが、その仮説の上に立って、さらに「もう一步前進」して、個的生命と類的生命の生命維持・持続に関して、次のごとき仮説を仮設している。

生命の維持・持続という目的に対しては、多数の細胞が結合して生命の連合体（細胞国家）をつくるということが有効な手段となっている。その究極の理由は二つの個体（細胞）が合体し、いわゆる接合がおこなわれると、生命力の「不均等化」が生じ、その結果、それぞれが強化され、若返るという物理・化学的生命現象に由来する。精神分析が獲得したリビドー説をこの細胞間相互の關係に適用してみると次のような仮説が仮設される。

あらゆる細胞内に活動している「生の本能」は生命の維持・持続をめざして他の細胞と合体・結合しようとする。細胞間の結合がおこなわれると、両細胞内に活動していた「生の本能」は同じく両細胞内に存在していて活性化した「死の本能」を中和して細胞の生命の維持・持続をはかるが、細胞のなかには、生命の連合体の生存の犠牲となって、「死の本能」に従って死滅するものもある。⁽³²⁾ こうして「細胞国家」にあっては個々の細胞の犠牲の前に、全体としての生存が保たれているという仮説である。

この生命の維持・持続に関する仮説は、「性本能の由来」に関する仮説に通底している。その最深の源泉は二つの個体（細胞）の合体・接合→若返りというあの物理・化学的生命現象にある。両

質(性)の合体、混合、接合は「潜在的な不滅の力の維持」－「生命ある物質の不死」－には大きな利点を与えるものであり、「生命体」にはその利益を追求する、好ましいことへの固執・反復が形成される。それが「性本能」であるという仮説である。

以上論じてきた生命の維持・持続の仮説の中核になるコアの仮説が「生の本能」と「死の本能」との中和－混合、結合、合金化とそこからの解離－の仮説である。この仮説は「死の本能」の「攻撃(破壊)本能」への転化にからまる、フロイトの「文明論」にあっては重要な仮説なので、次に新に1章をもうけて、この仮説について論じたい。

第4章 「生の本能(リビドー)」と「死の本能(モルティド)」との混合と解離

－「置換エネルギー *verschiebbare Energie*」⁽³³⁾－

リビドー *libido* というのは「生の本能」のエネルギーであり、モルティド *mortido* ⁽³⁴⁾ というのは「死の本能」のエネルギーである。両者は「生命体」のなかで混合・結合したり、その状態から解離したりしているが、フロイトはリビドーにもモルティドにも転換していくことが可能な両者の混合・結合⇒解離の状態にあるエネルギーを「置換(しうる)エネルギー」と呼び、「生命体」の生命現象は、根本的には、その「置換エネルギー」によって支えられていると仮説した。

以下、その仮説の内実を、フロイトの立論にそってさらに詳しくみていくことにしよう。

「死の本能」に負わされた課題は有機的生物を生命のない状態にひきもどすこと、有機体を無機的静止状態へ還元してしまうことであり、それに対し、「生の本能」のめざすところは分解されて分子の状態になっている「生命ある物質」をひろく集合させて統一し、生命を保持しつつそれを複雑化することであり、死を終末とする生命現象はこの両本能の協力作用と反対作用から生ずる。⁽³⁵⁾これがフロイトの「文明論」を支える「人間論」の基礎視角である。⁽³⁶⁾

この「生命体」の生命現象を貫く両本能の闘争と妥協、協力作用と反対作用というアンビヴァレンツの内実を解明するために、それを支えるものとして、フロイトは、両本能は100パーセント純粋なかたちで存在しているのではなく、きわめて複雑な度合で混合し⁽³⁷⁾かつ解離しているという仮説をたて、さらに、その下に「置換エネルギー」を仮説したのである。「『置換エネルギー』を仮定しないと、われわれは一步も進めない」(参考文献〔V〕, [6], P.288)と。

それではフロイトは「置換エネルギー」を仮説することによって、「心(的作用)」の解明にむかってどのような前進を得たのであろうか。本稿では次の3点にしばって論じておくことにする。⁽³⁸⁾

第1は「愛と憎しみの両極性」等に見られるごとき通常のアンビヴァレンツの解明である。フロイトはそのようなアンビヴァレンツというものは「生の本能(リビドー)」と「死の本能(モルティド)」との結合からの解離というよりはむしろ不完全な混合であると仮説したのである。

「また、神経症の素質の中では強化されている、通常のアンビヴァレンツを解離の結果として理

解することができるかどうかという問題もここから生まれてくる。しかし、このアンビヴァレンツは非常に根源的なもので、むしろ、不完全な衝動混合と考えねばならないであろう。」(参考文献〔V〕, [6], P.286)。

第2は「破壊（攻撃）本能」の由来—「死の本能」の「破壊（攻撃）本能」の転化—の解明である。

「死の本能（モルティド）」は本来唾でそれが内部で作用し「破壊（攻撃）本能」としてあらわれてこない間は沈黙しているが、「細胞」と「細胞」とが結合すると—単細胞の要素的有機体と多細胞生物との結合がなされると—そのなかには内在化していたモルティドが活性化する。しかしその際、リビドーがモルティドの死への傾向を中和して無害なものにする。さらにリビドーはモルティドの大部分を筋肉活動の援助のもとに外部に放射し、外界の諸対象へと向わせる。フロイトはそれが「破壊（攻撃）本能」となってあらわれる、「破壊（攻撃）本能」は規則的にエロスに奉仕し、放出の目的にそっているといふ仮説したのである。⁽³⁹⁾

「死の本能（モルティド）」はそのすべてが「破壊（攻撃）本能」となって外部に振り向けられるわけではない。その一部は「生の本能（リビドー）」と「死の本能（モルティド）」の混合・合金化として、つまり、「置換エネルギー」として、「生命体」の内部にとどまっている。

第3はその「生命体」の内部にとどまった「置換エネルギー」の運命の解明である。

「置換エネルギー」はリビドーによって中和されたもの、つまり、「リビドー」と「モルティド」との混合・合金化にあるものであるから、リビドーと同じくエロスの作用し⁽⁴⁰⁾、エロスの運命をたどる。つまりそれは「同一視」によって形成された「自我」の変化した部分である、「超自我」に貯蔵されていく。こうして内部にとどまった「置換エネルギー」は「超自我」の発達と共に「内なる攻撃力（エネルギー）」となって、内界で自己破壊的に作用するのである。

「超自我の発生とともに、自我の内部にかなりの量の攻撃本能 Aggressionstrieb が固定化し、内界で自己破壊的に作用する。」(参考文献〔VIII〕, [9], P.160)。

上にみた「置換エネルギー」の運命は「自我理想」に至るリビドーの運命に対応している。そして、そのことがフロイトの「人間論」→「文明論」の要^{カナメ}になっているのであるが、その議論は別稿にゆずることにしよう。

結び 「本能論」から「人間論」へ

以上本稿ではフロイトの「文明論」を論ずることをめざして、その「本能論」を論じた。フロイトの「文明論」を論ずるためには、次に、本稿で論じた「本能論」を基礎にすえてその「人間論」を論じなければならない。

フロイトの「人間論」にあつては、「大いなるX」は「デモニッシュな力」となって登場する。この「デモニッシュな力」と「自我」との闘争がフロイトの「人間論」のテーマであり、そのめざすところは、その闘争の勝利による「自我の確立」―「自立」―である。

それではフロイトの「本能論」にあつて、「デモニッシュな力」にうちかち、「自我」を確立せしめる、人間の「完成へむかう本能」はいかに論じられているのであろうか。そのことを論じて本稿を結ぶことにしよう。

結論からいえば、フロイトは「完成への本能」の存在を信じていない。それが人間のなかにあるという信仰は幻想にすぎない、といい切っている。

「われわれの多くのものにとっては、精神的活動と倫理的昇華の現在の段階へと人間を引き上げ、さらに超人にまで発展することを約束するはずの完成への衝動が、人間自身の中にあるという信仰を断念することは困難であろう。しかし私は、このような内的な行動を信じないし、このような快い幻想をまもる手段を知らない。」(参考文献〔Ⅲ〕, [6], P.176～7)。

そして完成へのやむなき衝迫とみられるものは「本能抑圧」の結果であると考えている。

「少数の個人において、完成へのやむことなき衝迫とみられるものは、当然、人間文化の価値多いものがその上に打ちたてられている衝動抑圧の結果として理解されるのである。」(参考文献〔Ⅲ〕, [6], P.177)。

つまりフロイトは有機的なものをより大きな統合にまとめあげるエロスの努力が「完成本能」を代用していると仮説したのである。⁽⁴¹⁾

我々はフロイトの「人間論」の「自我理想」―最も重要なリビドーの運命の表現―に於て、「完成本能」の代用をみることになるであろう。そのことはフロイトの「人間論」に於て論ぜられる。

(いいおか ひでお・本学経済学部名誉教授)

注

- (1) フロイトの「科学的世界観」とそれにもとづいて展開される「方法論」については、稿をあらためて論じなければならない。
 - (2) フロイトは、「天地宇宙」の諸現象や「有機体」の生命現象はいうまでもなく、たとえば、人間の「心（の作用）」という「実在そのもの」を「大いなるX」ととらえている。人間の「科学」をもってしては「心（の作用）」という「実在そのものに到達しうる見込みは殆どない」という意味である。フロイトは「そこにあることが推定されるだけの実在（心）」に接近するために諸仮説を仮設し、「実在そのものに」できるだけ近似したものを発見しようとつとめたのである。（参考文献〔Ⅷ〕，〔9〕，P.200）。
 - (3) Triebについては訳者によって、「本能」、「衝動」、「欲動」等の訳語があてられている。同一論文のなかで、「本能」と「衝動」あるいは「欲動」を訳し分けている場合もある（なお、Triebの定義およびその訳語の詳細については小此木啓吾による参考文献Ⅱの訳注1，〔6〕，P.60、および（欲動）の解題，〔6〕，P.433～P.434を参照のこと）。また外林大作は「フロイト自身がトリープと本能（Instinkt）を区別しているのですから、本能という訳語を使うことは得策ではない」（参考文献〔X〕，P.85）と、「衝動」という訳語をあてている。しかし、Triebが心的エネルギーとして現象する場面では「衝動（欲動）」という訳がいいかもしれないが、Triebは本来、肉体的エネルギーとして生命体の細胞内に充満して生物の生命活動をつきうごかしているものなのである。さらにフロイトにあってTriebは、本稿第1章の3と4で詳論するように、それぞれの「生命体」が生命の発展史のなかで歴史的に獲得した、そしてその「生命体」の生得的な「性向」を規定する、いわば、「遺伝因子（DNA）」のごときもの—「刺激作用の沈澱物」—としてとらえられている。以上2点を考慮にいて、筆者は、フロイトのTriebという語には、一貫して、「本能」という訳語を与えている。ただし、引用文の場合には、訳者の訳を尊重して、「衝動」あるいは「欲動」という訳をそのまま残した。
 - (4) 「ひるがえってみれば、無生物は生物以前に存在したとしかいえないのである（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.174）。
 - (5) 「だからこそそこに、精神の物理的、身体的随伴現象を仮定しないわけにはいかない……精神分析学は、いわゆる身体的随伴現象といわれているものが、本質的に精神的なものであると説く」（参考文献〔Ⅷ〕，〔9〕，P.166）。
 - (6) 「われわれは精神生活の、いや、おそらくは神経活動一般の支配的な傾向として、快感原則においてうかがわれるように、内的な刺激緊張を減少させ、一定の度合にたもつか、またはそれを取りのぞく傾向があるのを知った（バーバラ・ロウの表現による涅槃原則 Nirvanaprinzip）。」（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.87）。
- 「われわれは一切の心的事象を支配する原則を、フェヒナーのいわゆる安定への傾向の特殊ケースとして把握し、そして、この心という一装置は、そこへ向かって押しよせる総刺激量を無力なものにしたり、あるいは少なくともできるだけ低いものにしたり、あるいは少なくともできるだけ低いものにしたりする意図を持っていると考えた。バーバラ・ローはこのように仮定された心の傾向を涅槃原則と呼ぶことを提案した。われわれもこれに異存はない。」（参考文献〔Ⅵ〕，〔6〕，P.300）。
- (7) しかし、フロイトは後にこの考え方を修正する。快・不快は「量的要因」に依存するのではなく、それをベースとした質的なもの—刺激量の変化、増大、低減におけるリズム、時間的経過—に多く依存していると。（参考文献〔Ⅵ〕，〔6〕，P.301）。
 - (8) 「本能自身、少なくともその一部は系統発生の途上で、生物にたいしてさまざまな影響をおよぼした外部からの刺激作用の沈澱物である、と仮定することができよう。」（参考文献〔Ⅱ〕，〔6〕，P.62）。
 - (9) 「このようにして、生命ある有機体は、生の目標にもっとも短い道筋を経て（いわゆる短絡によって）到達することを助けるかも知れぬ作用（危険）に、きわめてはげしく抵抗するというパラドックスが起こる。」（参考文献〔Ⅲ〕，〔6〕，P.174～5）。
 - (10) 筆者は「モルティド」という言葉を参考文献〔Ⅷ〕，〔9〕，P.160、「訳者の注」によって教わった。
 - (11) PsycheあるいはSeeleという語には、精神あるいは心という訳語があてられている。Psycheという語は特に人間の心に対応するものであるので精神という訳語をあてた方がいいのかもしれない。しかし筆者は、次の二つの理由で、Psyche、Seeleの両者に、心という訳語をあてたい。その第1の理由は、フロイトにあって「心（の作用）」は、人間にのみ固有なものではなく、「神経」をもつ「生命体」すべてに共通するものであるから—「かえるの精神」よりは「かえるの心」といった方がよい—であり、第

- 2の理由は「自我」というにおよばず「超自我」に至るまで類人猿は所有しており、人間に固有の「精神」領域は、殆ど見い出せないくらいであるからである。
- (12) フロイトは「身体(筋肉)の作用・活動」と、「心の作用・活動」とを対置し、両者を媒介するものとして「本能の作用・活動」を置いている。それ故、Seelenleben という語には「心の作用・活動」と「心的生活」の両方の意味をこめたい。
- (13) フロイトの「科学的心理学草稿」はこの第1の系列の所産である。
- (14) 「すなわち第一の仮説は精神の局在性に関係している。われわれは、精神生活に空間的拡がりと多数の部分から成る総合性という性格を与え、精神活動をこのような特徴をそなえた一種の装置の性能の現われであると仮定する。」(参考文献〔Ⅷ〕, [9], P.157)。
- (15) 「エス」、「自我」、「超自我」については、本稿では、紙面の都合で、3と4の節で必要最小限ふれられるのみで、詳論は別稿(「フロイトの人間論」)にゆずることにする。
- (16) 「心理学においては、力点をこの身体的過程に置き、その中に真に精神的なものを認識し、意識的過程についてこれまでとは違った評価を試みることになるのは当然だろう。……しかし、まさにこの試みこそ精神分析学の課題であり、またこれが精神分析学の第二の基本仮説である。精神分析学は、いわゆる身体的随伴現象といわれているものが、本質的に精神的なものであると説く。」(参考文献〔Ⅷ〕, [9], P.166)。
- (17) 「われわれの想像では、エスの身体的なものへ向かっている末端は開いていて、そこから欲動欲求を自分の中へ取り込み、取り込まれた欲動欲求はエスの中で自己の心理的表現を見出すのですが、しかしどんな基体の中でそれが行われるのかはわれわれには解らないのです。エスはもろもろの欲動から来るエネルギーで充満してはいます。」(参考文献〔Ⅶ〕, [1], P.447)。
- (18) フロイトは「エス」と「自我」が一如になっている、つまり、「対象リビドー」と「自我リビドー」とが区別されていない「心(エス=自我)」の原初状態を仮説してはいる。(参考文献〔I〕, [5], P.130)。しかし、本稿では原初では「心(的装置)」は「エス」だけで、そのなかに、経験を通じて、「エス」の変形、それからの分離として「自我」が形成され、さらにその「自我」の内部に「超自身」が形成されていくという仮説に単純化して論をすすめていく。
- (19) フロイトは「リビドーの貯蔵所」が二つあることを明言している。「エス」という貯蔵所と「自我」という貯蔵所である。しかし両者がどのような関係にあるか「エス」という貯蔵所に充満するエネルギーと「自我」という貯蔵所に充満するエネルギーとが、どのような関係にあるのかについては、明確な仮説を示していない。我々は4で論ずる「自由に動き得る可動エネルギー」(「エス」と「拘束されたエネルギー」(「自我」)の議論で、わずかに、その関係を推測するのみである。
- (20) 「この性愛的対象選択が自我変化に転ずることは、自我がエスを支配し、エスとの関係をふかめることができる一つの方法である。」(参考文献〔V〕, [6], P.277)。
- (21) 「自我が対象の性状を身につけると、自我は、いわばエスにたいしてさえ、愛の対象としての関係をむすぶことを強いる。そして『見たまえ、お前は私をも愛することができる、私は対象にそれほど似ているのだ』といって、対象の喪失を代償することをもとめる。」(参考文献〔V〕, [6], P.277)。
- (22) 「このように、対象リビドーが、自己愛的リビドーに変わることは、明らかに性的目標の放棄をもたらし、非性化 Desexualisierung、すなわち一種の昇華 Sublimierung をもたらす。」(参考文献〔V〕, [6], P.277)。
- (23) 「たいていは五歳で完了する最初の段階で幼児は、両親の一人に最初の愛の対象を発見しその満足をもとめ、彼の性的衝動は、すべてこの対象に向かって統一されていた。ついであられる抑圧は、この小児的な性的目標の大部分を断念するように強制して、両親との関係に深刻な変化をのこした。幼児は依然として両親にむるばれたままであるが、それも『目標を禁止された』衝動とよばねばならない衝動でむすばれているのである。幼児がその後、この愛する人間にたいしていだく感情は、『情愛的』 zärtlich といわれる。しかし無意識の中には、以前の『感覚的な』 sinnlich 傾向が多少とも強くもたれていて、根源的な流れのすべてが、ある意味では存続していることはよく知られているとおりである。」(参考文献〔IV〕, [6], P.227)。
- (24) 「このような内部興奮の最大の根源は、いわゆる有機体の衝動であり、身体内部から派生し、心的装置に伝達されたあらゆる力作用の代表であり、心理学的研究のもっとも重要な、またもっとも暗黒な要素でもある。」(参考文献〔Ⅲ〕, [6], P.170)。

- (25) フロイトの「本能論の運命」については、小此木が手際よくまとめている。参考文献〔Ⅱ〕の解題、[6], P.432を参照のこと。
- (26) ここで前期の段階というのは1920年の「快感原則の彼岸」で劇的な学説転換をなすまでの段階で、主として1916~7年の「精神分析入門」でまとめられた学説の時代をさす。
- (27) フロイトの「初期学説」は1914年の「ナルシズム入門」によって少修正をうけている。従ってフロイトの学説は1914年までの「初期学説」、1914~1920の「中期学説」、1920年以降の「後期学説」と三段階でとらえるべきであるかもしれない。
- (28) 「個人は現実的には二重の存在をいとなんでいるのであって、自己目的であると同時に鎖の一環でもあり、この鎖のために自己の意志に反し、またはともかく自己の意志をもたずに奉仕している。個人は自分では性愛を自己の意図の一つであると考えているが、見方を変えれば、個人は自己の遺伝形質の付属物であるにすぎず、このもののために自分の力を快楽につられて捧げているのであり、ある一おそらくは一不滅の実体を担っている死すべき者であって、ちょうど家督相続人が自分よりも長持ちのする世襲財産を一時的に所有しているようなものなのである。」(参考文献〔Ⅰ〕, [5], P.113)。
- (29) このA. ヴァイスマンの「有機体の生命の持続と死」というテーマについての「生物学」的学説は3のところで示すように、実は、「生の本能」と「死の本能」との、区別・対立の基礎理論にすえられているのである。
- (30) フロイト自身、このような「本能」概念の解釈がえについて、次のようにいっている。
「したがって、もしも精神分析的な研究自体から本能に関するもっと有用な別の前提が生じてくるとするならば、この仮説を捨て去るのが、私にとってはやはり首尾一貫したことになるであろう。」(参考文献〔Ⅲ〕, [6], P.114)。
- (31) ただしA. ヴァイスマンは「死を生殖の直接の結果」とみるゲッテの見解—死は「単細胞動物」ではなく、多細胞動物ではじめてあらわれてくる現象である、何故なら、多細胞動物では身体細胞と胚原形質が区別されているから、個体の無制限な生命維持は、類的な生命持続（「生命ある物質の不死」あるいは「潜在的な不滅の力の維持」）にはまったく目的に合わない浪費であるから個体は性的機能を果たしたら死ぬのだという見解—を継承していた。それに対しフロイトは「単細胞動物」でもその内部の化学緊張が均等化されれば「死ぬ」のだと、生物学的実験結果をもって反論している。(参考文献〔Ⅲ〕, [6], P.181~2を参照のこと)。
- (32) 「精神分析が獲得したりビドー説を、細胞相互間の関係に適用し、次のように想像することができよう。あらゆる細胞中に活動している生の本能あるいは性本能が、他の細胞を対象にえらび、そのために刺激された死の本能を部分的に相殺して細胞の生命をたもつ一方、他の細胞も同一の任務を果たし、さらにもう一つの細胞はこのリビドー機能を実行することによって犠牲になるのである。」(参考文献〔Ⅲ〕, [6], P.183)。
- (33) verschiebbare Energie というのは frei bewegliche Energie とは区別されるべきエネルギーである。また、それが、「エス」、「自我」、「超自我」の各所に移動することがあるとしても、移動するということは心的エネルギー一般の前提であって verschiebbare Energie 固有の特徴であるわけではない。verschiebbare Energie というのはリビドーとモルティドとの混合とそれからの解離状態にあるエネルギーで、リビドーにもモルティドにも、そして主として両者の混合に転換していくエネルギーである。それ故、筆者は「移動する（しうる）エネルギー」という訳語をさけ、「置換（しうる）エネルギー」という訳語を採用させてもらった。
- (34) 注 (10) を参照のこと
- (35) 本能は「二つの群に分かれ、つねにより多く生きようとする実体を集めてより大きい単位にまとめ上げて行こうとするエロスの諸欲動と、この傾向に抗して、生きているものを無機の状態に還元しようとする死の諸欲動とになります。死を終末とする生命現象は両欲動の協力作用と反対作用とから生ずるのです。」(参考文献〔Ⅶ〕, [1], P.473)。
- (36) フロイトの「人間論」については別稿で詳論する。
- (37) 「両種の欲動がきわめて複雑な度合でまざりあい絡みあい、その結果われわれはそもそも百パーセントに純粋な死の欲動や生の欲動というものを仮定して事を運んでゆくわけにはゆかず、それら二欲動の種々なる混合型がいつも問題にされざるをえないのだということである。」(参考文献〔Ⅵ〕, [1], P.304)。

- 「欲動の動きはすべてこの二種類の欲動の今述べたような混合、合成から成るという仮定をするのです。むしろその混合の割合は実にさまざまです。」(参考文献〔Ⅶ〕, 〔Ⅰ〕, P.471)。
- (38) 「サディズム」は解離の典型であり、癲癇発作は解離の産物あるいはその徴候である。「置換エネルギー」の仮説はさらにリビドーの進歩と退行という性的現象の解明に、なかんづく、「心的装置」の構造と二種類の本能との間の関係の解明に有効である。しかし、ここでは、その詳細を論ずる余裕はない。
- (39) 「単細胞の要素的な有機体が多細胞の生物に結合する結果、単細胞の死の本能を中和し、破壊的興奮を、特別な器官を媒介にして外界に向け換えることができたのであろう。この器官は筋肉系統であり、死の本能は—おそらくただその一部分かであらうが—外界あるいは他の生物を破壊する衝動として現われることになったようにみえる」(参考文献〔Ⅴ〕, 〔6〕, P.285)。
- 「(多細胞)生物においてリビドーは、細胞中に支配する死あるいは破壊の欲動にぶつかる。この欲動は、細胞体を破壊し、個々一切の有機体単位を無機的静止状態(たといそれが単に相対的なものであるとしても)へ還元してしまおうとする。リビドーはこの破壊欲動を無害なものとし、その大部分を、しかもやがてある特殊な器官系、すなわち筋肉の活動の援助のもとに外部に放射し、外界の諸対象へと向かわせる。それが破壊欲動とか征服欲動とか権力への意志とかいうもののなのであろう。」(参考文献〔Ⅺ〕, 〔6〕, P.303)。
- (40) 「もしこの移動エネルギー-Verschiebungs energieが、非性化したリビドーであるならば、これもまた昇華されたということができよう。なぜならば、この移動エネルギーは、統合し結合させようとするエロスの主目的をつねにかたくまもり、自我の特徴であるあの統一性を—あるいはそれをめざすのが自我の特徴である—確立するために奉仕するからである。」(参考文献〔Ⅴ〕, 〔6〕, P.289)。
- (41) 「つねに有機的なものをより大きな統合にまとめあげるエロスの努力は、確認しがたい『完成衝動』を代用する働きをもっているにちがいない。」(参考文献〔Ⅲ〕, 〔6〕, P.177)。

参考(引用)文献

- 〔Ⅰ〕フロイト (1914) 「ナルシズム入門」『フロイト著作集〔5〕』人文書院 (1974)
- 〔Ⅱ〕フロイト (1915) 「本能とその運命」『フロイト著作集〔6〕』人文書院 (1974)
- 〔Ⅲ〕フロイト (1920) 「快感原則の彼岸」『フロイト著作集〔6〕』人文書院 (1974)
- 〔Ⅳ〕フロイト (1921) 「集団心理学と自我の分析」『フロイト著作集〔6〕』人文書院 (1974)
- 〔Ⅴ〕フロイト (1923) 「自我とエス」『フロイト著作集〔6〕』人文書院 (1974)
- 〔Ⅵ〕フロイト (1924) 「マゾヒズムの経済的問題」『フロイト著作集〔6〕』人文書院 (1974)
- 〔Ⅶ〕フロイト (1933) 「精神分析入門 (続)」『フロイト著作集〔1〕』人文書院 (1974)
- 〔Ⅷ〕フロイト (1940) 「精神分析学概説」『フロイト著作集〔9〕』人文書院 (1974)
- 〔Ⅸ〕ピーター・ゲイ、鈴木晶訳 (1997) 『フロイト』みすず書房
- 〔Ⅹ〕外林大作 (1983) 『フロイトの読み方』誠信書房

※なお、フロイトの著作についてはすべて『フロイト著作集』人文書院 (1974) により、その巻数とページ数を示す。